

# Buddhaguhya の Tantra 分類法

越 智 淳 仁

Buddhaguhya の Tantra 分類法を研究する場合、現在サンスクリット資料が伝えられていないので、チベット資料に依るしか方法がない。彼が著した多くの書物の中で、特に Tantra の分類法を知る上での重要なものは次のものである。「大日経撰義<sup>1)</sup>」及び「大日経広釈<sup>2)</sup>」と、「上禅定品広釈<sup>3)</sup>」及び「金剛摧破と名づくる陀羅尼広註宝明<sup>4)</sup>」。これ等の資料の中で、「大日経」の両注釈書と「上禅定品広釈」等の注釈書との間には、Tantra の分類を説明する仕方に、広と略の相違がある。

まず、Tantra の分類を「大日経広釈」に依つてみると、次の様に述べる。

真言門から入つて行ずる者達に二種があるとし、有所得 (dmigs pa dan bcas pa) を信解する者達と、甚深広大 (Zab ciñ rgya che ba = 無所得) を信解する者達との二種を挙げる。

この《有所得》を信解する者達の為に「蘇婆呼童子経」、「持明蔵」等の外の行を主とする Kriyā-Tantra を挙げる。

《甚深広大》を信解する者達の為に「聖真実撰経」等の内の yoga を主とする Yoga-Tantra を挙げる<sup>5)</sup>。

又「大日経」の性格を次の様に性格づけている。

この「大日経」も又、「聖真実撰経」と同様に方便と般若を主とした Yoga-Tantra であるが、しかし、所作を信解する者達を受持せんが為に、Kriyā-Tantra に随順する行等も示されたものであるから、(この「大日経」は) Kriyā-Tantra か、あるいは、両者(に通ずる) Tantra (gñis kañi rgyud) として性格づけている<sup>6)</sup>。

ここで云う《両者に通ずる Tantra》とは、「大日経」を Kriyā-Tantra と Yoga-Tantra との両者に通ずるものとして、性格づけているのであるから、従つて「大

---

1) 東北 No. 2662.

2) 東北 No. 2663.

3) 東北 No. 2670.

4) 東北 No. 2680.

5) 東北 No. 2663. fol. 261a.

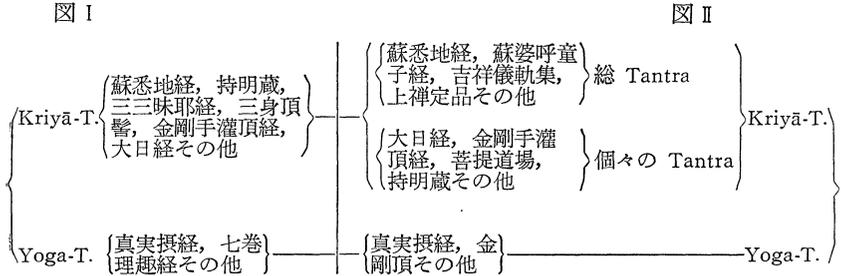
6) 東北 No. 2663. fol. 261d.

日経」は、両 Tantra に共通する性格をもつものであると共に、両 Tantra の中間の性格をもつものとして性格づけられている。

しかし、この「大日経」の様な《両者に通ずる Tantra》が、Tantra を分類する際の Kriyā, Yoga-Tantra と同等に肩を並べるまでには、まだいたっていない。この事は、後に述べる「上禅定品広釈」の所説をみれば、より明確である。

次に、「大日経撰義」では、Tantra を Kriyā と Yoga-Tantra との二つに分け、この両者に諸經典を配当している<sup>7)</sup>。諸經典の配当と云う点からみれば、「大日経広釈」よりもこの Text の方が詳しい。

以上の資料をまとめて図示したものが図 I である。



次に、Tantra の分類を「上禅定品広釈」等によつてみると、次の様に述べる。

眞言を念誦する場合の所作が、総べての Kriyā-Tantra の中の《総儀軌 (spyi hi cho ga) を集めた Tantra》である「蘇悉地経」と「蘇婆呼童子経」と「吉祥儀軌集」等の諸經典と、《個々の Tantra (bye brag gi rgyud)》である「大日経」と「金剛手灌頂経」と「菩提道場」と「持明藏」等の諸經典の中に述べられたのである<sup>8)</sup>、と云う。

この個所では、Tantra の分類を Kriyā-Tantra だけについて述べ、Kriyā-Tantra を諸經典の性格にもとづいて、《総 Tantra》と《個々の Tantra》との二つに分ける。この事は、「大日経」の両注釈書ではみられなかつた説である。この Kriyā-Tantra を更に二分する説が「金剛摧破と名づくる陀羅尼広註宝明」にも出されている<sup>9)</sup>。しかし、この Text では名前だけしか示されていない。

Yoga-Tantra の所説をみると、「聖眞実撰経」等が Yoga-Tantra であるとし、

7) 東北 No. 2662. fol. 3b.

8) 東北 No. 2670 fol. 9a.

9) 東北 No. 2680 fol. 176b.

この Yoga-Tantra の密意釈に「金剛頂」(Vajraśekhara) 等があると<sup>10)</sup>する。以上の資料をまとめて図示したのが、図Ⅱである。

今、上に挙げた図Ⅰと図Ⅱを比較検討する事によつて、我々は Buddhaguhya 当時、即ち A. D. 8 世紀頃の Tantra 分類法を知ることが出来る。この Buddhaguhya の Tantra 分類法を明らかにすることによつて、後のアチーシャやプトンの Tantra 分類法の歴史の変遷をより一層明確に把握し得るものとする。

この様に、図Ⅰと図Ⅱを比較検討する事によつて、次の事が解つた。

第一に、Buddhaguhya の Tantra 分類法は Kriyā-Tantra と Yoga-Tantra との二分法である。

第二に、Kriyā-Tantra に関して、図Ⅱでは、《総 Tantra》と《個々の Tantra》とに二分する。これは、Kriyā-Tantra の細分化である。

第三に、図Ⅰと図Ⅱにおける「大日経」の扱いである。図Ⅰでの「大日経」の扱いは、既に述べた如く、「大日経」の性格から云うと、Kriyā-Tantra であり、かつ、Yoga-Tantra と Kriyā-Tantra に共通する性格をもつた Text であるとする。従つて、この「大日経」は Kriyā-Tantra と Yoga-Tantra との中間的性格をもつ Text であると理解してきた。

ところが、図Ⅱでは、kriyā-Tantra の中でこの「大日経」を「金剛手灌頂経」等の諸経典と共に《個々の Tantra》としてまとめ、「蘇悉地経」等の《総 Tantra》と区別している。従つて《総 Tantra》の下に集められている諸経典は、「蘇悉地経」と同じ性格をもつものであり、《個々の Tantra》の下に集められている諸経典は、「大日経」と同じ性格をもつものであると云い得る。ここに、Kriyā-Tantra を更に二分した彼の意図が存するのである。

第四に、彼の Tantra 分類法は二分法であるが、Kriyā-Tantra を更に二分しているのであるから、二分法から三分法へ移行する Tantra 分類の過渡期であると云い得る。

第五に、Yoga-Tantra については、「聖真實撰経」等を挙げ、図Ⅱでは「金剛頂」(Vajraśekhara) を Yoga-Tantra の密意釈と呼んでいる<sup>11)</sup>事から、Buddhaguhya の時代に既に Yoga-Tantra の密意釈と呼ばれるものが存在していた事は注目されてよい。

以上 Buddhaguhya の Tantra 分類法をみて来た。次に彼と同時代の学匠と

10) ベキン No. 3495 fol. 34a.

11) ibid.

して挙げられる Vimalamitra の Tantra 分類法をみることにする。

この Vimalamitra と云う人は、「心摘優波提舎」(Citta-bindūpadeśa-nāma)<sup>12)</sup>の著者の一人である。この Text の著者は三人挙げられていて、他の二人は Buddhaguhya と Līlavajra とである。又、この Vimalamitra について歴史書「デブテルグンボ<sup>13)</sup>」では、Buddhaguhya の弟子であるとされている。これらの事からも解る様に、Vimalamitra は Buddhaguhya と同時代の人であつたと理解される。

この人の著した「聖金剛摧破陀羅尼と名づくる釈広註<sup>14)</sup>」には、Tantra の分類を Kriyā-Tantra と Yoga-Tantra との二つに分類している<sup>15)</sup>。従つて、Buddhaguhya の時代には、Tantra の分類法として、二分法が採用されていた事が解る。

以上の論述から、Buddhaguhya の Tantra 分類法は二分法であることが解つた。次はしばしば上述してきた“Buddhaguhya の Tantra 分類法は二分法であり、かつ二分法から三分法へと移行する過渡期のものである”と云う際の、“二分法から三分法へと移行する過渡期”について、論を進めることにする。

Tantra を Kriyā と Yoga-Tantra とに二分し、この Kriyā-Tantra を更に二分する場合の《総 Tantra》と《個々の Tantra》とは、後の Tantra 分類法、特にプトンの四部 Tantra 分類法に比較してみた時、《総 Tantra》が Kriyā-Tantra に当り、《個々の Tantra》が Caryā-Tantra に当るのである<sup>16)</sup>。したがつて、Buddhaguhya の Tantra 分類法は Kriyā と Yoga-Tantra の二分法から、Kriyā と Caryā と Yoga-Tantra との三分法へ移行する過渡期のものであると云い得る。この Caryā-Tantra の名称がいつ頃現われたかと云うと、A. D. 10 世紀後半から A. D. 11 世紀のもののみなされる「智金剛集と名づくる怛特羅<sup>17)</sup>」の中にすでにみえている。この事からも解る様に、Caryā-Tantra と云う名称はかなり早くからあつた事が解る。しかし Buddhaguhya 当時の Tantra 分類法にはまだ見出し得ない名称であるから、彼以後に出来た名称であろう。しかし名称こそ違え、

12) ベキン No. 4738.

13) The Bulue Annals part I p. 11.

14) ベキン No. 3506.

15) *ibid.* fol. 201b.

16) 「カルチャク」や「総タントラ解説」に示す四部 Tantra. 即ち Kriyā, Caryā, Yoga, Anuttara-yoga-Tantra である。

17) 東北 No. 447.

内容からみて《個々の Tantra》が Caryā-Tantra に相当するのであるから、この Caryā-Tantra の素材を Buddhaguhya の Tantra 分類法に求めることが出来る。だが、Tantra の分類が、Buddhaguhya からプトンにいたるまでの間には、二分法、三分法、四分法へ順次変遷していつたと云う事を云っているのではない。この間には、「智金剛集」の五分法あり、シラッダーカラワルマン作「無上ユガタントラ義入集」の四分法あり、アティージャ作「菩提道燈難語釈」の七分法ありで、プトンの四分法へ行くまでには、かなり複雑な Tantra 分類の変遷があつた事が知られる<sup>18)</sup>。この様に、Tantra の分類法にはかなりの相違があつて、しかも三分法 (Kriyā, Caryā, Yoga-Tantra) の名称はみられないが、Buddhaguhya が Tantra の分類法として Kriyā, Yoga-Tantra の二分法を用い、Kriyā-Tantra を更に《総 Tantra》と《個々の Tantra》とに二分したのは、二分法から三分法への過渡期といつてさしつかえないと思われる。

---

18) この種の研究に松長有慶著「チベット大藏經の密教経軌分類法の典拠について」日本西蔵学会々報第 10 号参照。